

Winfried Fauser SJ: *Der Kommentar des Radulphus Brito zu Buch III De anima. Radulphi Britonis Quaestiones in Aristotelis librum tertium De anima.*

Beiträge zur Geschichte der Philosophie und Theologie des Mittelalters, Neue Folge, Band 12, Münster 1974, Aschendorff.

K. リーゼンフーバー

現在の中世思想の研究が特に14世紀初期の思想に注目しているのは、この時代の豊富な写本がまだ数多く探索されないままに眠っているということ、またちょうどこの時代が、中世の思想・世界観から近世のそれへの転換の節目をなしているということによるであろう。こうした折から、ここで取り上げる著書において、14世紀初めのパリ大学における Magister の一人であった Radulphus Brito によるアリストテレスの *De anima* 注解の中心的部分(第3巻)が秀れた形で編集され解説されたことはたいへん歓迎すべきことと思われる。

編集者はケルンで作成されている Albertus Magnus 全集の編集委員の一人であるが、本書中のテキストについての解説(84頁)は彼の中世哲学・神学に対する卓抜した知識を表していると共に、古文書学・中世学・現代的編集技術の各方面にわたる学殖が各頁に示されている。彼は従来知られていなかった著作と写本の発見にもとづいて、Radulphus Brito のより完全な著作リスト(p. 16~23, 330~331)を作成するとともに、複雑な写本の材料から学問的に信頼ができかつ研究に使用しやすいテキスト(p. 87~313)の編集に成功した。テキストに見える多くの引用箇所を厳密にその源泉までさかのぼり、Radulphus Brito の用いた源泉とその翻訳を示すことにより、その思想史的依存関係を始めて解明したのである。

Radulphus Brito はいくつかの神学的著作のほかに包括的な哲学的著書、特にアリストテレスの著作についての注解書を残したが、15世紀の終わりごろの彼の選集版から分かるように、特に *Logica vetus* についての言語哲学的な著作が最も注目されてきた。しかしながら彼自身の人物像についてはほとんど未分明のままである。

パリ大学の哲学部で教区司祭として1308年ごろまで教鞭を取り、その後当時の慣習に従って神学部に移ったということだけは確かである。彼の写本は1295年から1320年の間に出来上がり、中世にはよく知られていたが、近世に入ってからは何百年も忘却されていた。19世紀に入ってから少しずつ光を浴びてきたが、その評価は場合によって異なっていて、トマス学派の一人と言われたり、スコトゥス学派、あるいはアヴェロエス派の一人ともみなされてきた。しかしここで編集されたテキストはちょうどそうした判別の基準となる知性論を含んでいて、それを見るとトマス・アキナスにあるような穏健なキリスト教的アリストテリズムを主張したことが明らかである。こうしてこの著作は、新アウグスティヌス学派側からの反論や教会側からの禁令にもかかわらずトマス派的なアリストテリズムが教区司祭の Magister たちの間においても展開・発展したことの何よりの証左である。その上、Radulphus Brito が、能動理性の唯一性を強調するアヴェロエス派的命題を厳しく批判しているのを見れば、13世紀から14世紀への転換期のパリ大学においてラテン・アヴェロエス派がまた復興していたことが納得される。

Radulphus Brito のアリストテレス解釈は、トマスの行ったような *expositio per modum commenti*, すなわちアリストテレスのテキストを短かい部分 (*lemmata*) に分解してその意味を出来る限り忠実に一步一步進んで解明するといったやり方でもなく、またアルベルトゥス・マグヌスの場合のように本来のテキストの意味と解釈者自身の意見とが区別出来ないようなパラフレーズでもない。彼の注解はむしろ体系的意図で書かれており、*expositio per modum quaestionis* という方法をとっている。中世後期への移行期から好まれていたこの解釈方法においてはある古典的テキストを逐語的に解釈するのではなく、そこに見出される主な問題を取り上げて、*quaestio* の体系的な形の中でそれを解決しようとする。

Radulphus Brito は、能動理性の唯一性を主張するアヴェロエスの見解に反対して、個々の人間の魂の厳密な意味での一性を強調している。つまり、知性は直接に第一質料によって個別化されて、人間の唯一の実体的形相すなわち身体の形相となる。新アウグスティヌス学派ではこういうふうに人間の知性を身体の形相とすることに反対したが、それは魂の不滅性が危うくされてしまうおそれがあったからである。Radulphus Brito は直接には新アウグスティヌス学派に言及してはいないが当の間

題には答えようとした。すなわち、知性的魂にとって本質的なことは、実際に身体の形相であるということではなく、形相になる適性 (aptitudo) を有しているということである。魂には死後においても自己に固有な身体への本性的傾向 (inclinatio naturalis) が残るから、身体がなくても魂は質料による個別性を保ちつつけるのである。

このように彼の靈魂論が厳密にトマスの教説に従って展開されるに比して、抽象 (abstractio) をめぐる論究はトマスの場合よりもはるかに広範に展開される。彼はそこで特に能動理性がどういうふうに表象 (phantasma) に影響を及ぼすかを明確にしようと努めている。認識の客観的妥当性を保持するために、能動理性の作用因的影響によって表象が存在論的に変更されるということを否定する。能動理性は受動理性に理性的形相を刻み込むこともなければ、感覚像 (species) の質料的条件を取り去ること (removens, prohibens) もしない。むしろそれは、光源が色にかかわるように、表象にかかわっている。能動理性の照らしの下で、表象の中に普遍的何性 (quidditas) が質料的条件なしに知性にあらわれてくるが、しかしその quidditas が質料的条件から存在論的に切り離されているわけではない。こうして受動理性が個別性による制限を認識しないで普遍的何性を把握できるようになる。

Radulphus Brito の著作においては、トマスの思想を個別的にはさらに発展させている点がいくつかあるが、その思索の特徴は創造性や根本的洞察というよりも、その徹底性や精緻さにあると言えよう。

この批判版はコメントを伴った中世のテキストの模範的な編集であると同時に、初期トマス学派の思想の発展に光を当てて、従来あまり知られなかった思想家を中世哲学界に紹介したものとして感謝すべきものであろう。